

(3) 事例研究から

子どもたちは、様々な「他」とのかかわりをもちながら生活している。その中でも、幼稚園生活における「自然」に着目して、事例を分析しながら研究を進めてきた。

下のような事例記録用紙を利用し、職員で留意点を確認しながら事例をまとめた。

＜事例記録用紙＞

対象		記録日	平成	年	月	日 ()
事例	子どもの姿	保育者の援助	子どもの姿	人	もの	自然
これまでの姿						
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>かかわりによって育まれる体験</p> <p>子どもの姿を会話や動きなどを交えながらまとめる。</p> <p>これまでの姿における自分らしさが事例を通してどのように広がったのかが一目で分かるようにまとめる。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>子どもたちの変容が分かるように「これまでの姿」を述べる。</p> <p>子どもの姿と合わせて、保育者としてどのように援助したのかを述べる。</p> <p>○ 子どもの姿を保育者としてどのように捉えたのかを述べる。 ○ 自分らしさを発揮できる子どもを育てるために、これからの保育者の援助の在り方について考察する。 (網掛けは保育者として援助を工夫したことや保育者として大切にしたいこと)</p> </div> </div>						
<p>今後の姿</p> <p>子どもの自分らしさの広がり</p>						

職員で出し合った事例については、その事例の中での実際の保育者の援助や環境構成の工夫・改善などを出し合い、様々な意見交換をする中で多面的な見方ができるように事例研究を進めていった。

次からは、1年をⅠ期～Ⅴ期に分け、期ごとの「自然」とかかわる子どもたちの姿と事例、自分らしさを発揮できるための「保育者の援助の在り方」「環境構成の工夫・改善」についてまとめたものである。

本園では、各期について以下のように捉えて、研究を進めてきた。

- ・Ⅰ期（4～5月頃）：入園，進級する中で新しい環境に親しむ，春から初夏の時期
- ・Ⅱ期（6～7(8)月頃）：生活に慣れてきて，遊びを楽しむ，梅雨から夏の時期
- ・Ⅲ期（9～10月頃）：戸外で体を動かして遊ぶことが多い，晩夏から初秋の時期
- ・Ⅳ期（11～12月頃）：友だちとのかかわりが広がる，晩秋から初冬の時期
- ・Ⅴ期（1～3月頃）：友だちとのかかわりが深まり，進級への期待が高まる，冬から初春の時期



○ I 期 ～自然とのかかわり～



チョウチョさん、早く降りてこないかな・・・。

柏餅，召し上がれ。



ここにダンゴムシがいるんだよ。



シロツメクサきれいだな。



いろんな花があるよ。



キュウリの葉っぱはフワフワするね。(茎は) チクチクするよ。

花束をつくったよ。



だんだんつなげられるようになってきたよ。(シロツメクサの冠づくり)

シロツメクサを集めてごはんをつくろう。



カレーライスができるからね。

おいしいね。



うみ組

オタマジャクシは何を食べるのかな？



ほし組



金魚さん，いっぱい食べてね。

はな組

二人で漕ぐと高くなって風が気持ちいい～！



先生，道路になったよ。(イチヨウの雄花の絨毯)



(バラの花びらで) お花屋さんです。

エビ，いるかな？



甘いピーマンになあれ。



ミニトマトさん，大きくなってね。



ウサギさん，いっぱい食べてね。



飼育舎

(生き物は) どこにいますか？



場面 シロツメクサでアクセサリーづくり

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

4月になると園庭にはシロツメクサが咲き誇り、真っ白い絨毯を敷いたように園庭が彩られる。年長児になると、日頃楽しんでいる料理つくりでシロツメクサの葉を混ぜたり、花を砂のケーキに飾ったりすることはもちろん、シロツメクサの花と茎をつないで首飾りなどのアクセサリーをつくりたいという姿が見られるようになる。子どもたちは何度か試すが、なかなかうまくつながらず試行錯誤していた。

子どもの姿

保育者の援助

〔4月10日(金)〕

○ シロツメクサで首飾りをつくる。

A「先生、シロツメクサの首飾りをつくって」

B「私も欲しい」

保「みんなでつくろうか。こうやってこうやって・・・

(つくり方を見せながら) 花を茎に巻きつけながら、ここをぎゅっと握ってつなげていくんだよ」

C「あっ、こんな感じ？」 D「難しいな・・・」

〔4月13日(月)〕

○ シロツメクサで首飾りをつくる。

B「Aちゃん、私の分もつくって」

A「いいよ。ちょっと待ってね」

保「Aちゃん、急につくるのが上手になったね。」

C「私もつくって」 D「私も！」

A「もう大変！長いシロツメクサがいいよ」

D「あっちにあるよね」 B「あそこね、行こう」

○ A児のつくり方を真似てつくる。

B「Aちゃん。これであってる？(いいの?)」

保「Bちゃんも、上手になってきたね」

A「そうそう、ここを持ってくるって巻くの」

B「だんだんできてきたよ」

保「いい感じだね」

○ 子どもたちがシロツメクサの首飾りが欲しいという気持ちを受け止め、自分たちでつくることができるのではないかという思いをもって、つくり方を紹介した。

○ 難しいけどやってみようとする意欲を大切にした。



○ 前週に比べて、急に上手につくるようになったA児の姿を見て、年長児に心地よい負荷となる活動になることを感じ、一緒に首飾りつくりを楽しんだ。

○ 首飾りつくりには、茎が長いものがよいことに気付く姿、長いものがある場所を知っている姿を見守った。

○ 試行錯誤しながらだんだんとつくれるようになる子どもたちの姿を励ますようにした。

「Bちゃんも、上手になってきたね」

考察

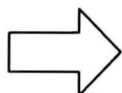
シロツメクサの花との触れ合いは、春ならではの遊びである。これまで保育者につくってもらったり、友だちや保育者と一緒につくったりしたことのある子どもたちは、自分でつくってみたいという気持ちが膨らみ、試行錯誤しながらも何とか自分でつくろうとする姿が見られた。

年長児になると、友だちのすることに刺激を受けながら遊びを楽しむ様子がよく見られる。このような子どもたちを見守りながら、子ども同士で教え合う姿を大切に、友だちとのかかわりの中で、互いのよさを気付くことができる教材を探り、活動と一緒に楽しんでいきたい。

子どもたちの会話を聞いていると、「長い茎のものはあの場所にあるよ」とこれまでの経験とのつながりを実感することが多い。このような経験の積み重ねも大切にしていきたいと感じた。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

シロツメクサの首飾りをつくらうとする姿



友だちの刺激を受け、試行錯誤しながらつくり方を伝え合い、楽しむ姿

自然への親しみ

感動体験

体を動かす楽しさ

対象児 年少児

記録日 平成21年 5月11日(月)

場面 カエルを見せて

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

入園して1か月が過ぎ、少し緊張気味だった子どもたちも徐々に園での生活の流れがわかり、落ち着いて過ごせるようになってきた。しかし保護者の姿が見えないと涙がこぼれる子ども数名おり、保護者に近くにいてもらうことで、安定して遊ぶ姿が見られる。

室内ではままごとやソフト積み木などを自由に使って楽しんでいる。園庭では砂場での活動が盛んになってきて、遊具のある場所や使い方を知り、毎日新しい遊び方で様々なことを経験している。

子どもの姿

- 数人の年少児と園庭を歩いていると、虫網と虫かごを持った年長児A児と出会う。
保「Aくん、何か釣れた？」
A「カエルを捕まえたよ」
B「カエル？」
C「カエルを捕まえたの？」
保「Aくん、はな組さんにも見せてくれない？」
A「いいよ」
- カエルの入った虫かごをみんなで取り囲んで見る。
保「大きいね」
D「うん」
- カエルを見た後、カエル跳びをする。
B「カエルはこうするんだよ」
保「そうだね。よく知ってるね」
- CとDも笑いながらカエル跳びをする。

保育者の援助

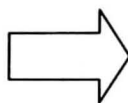
- 初夏の気候を存分に味わうことができるように、努めて戸外にできるように心掛けた。
- 年長児の持っている虫かごに水がたっぷり入っていたので生き物を捕まえているのなら、見せてもらおうと声をかけてみた。
- カエルを見て興味や関心をもつことができるように、子どもの目の高さに虫かごがくるようにし、一緒にじっくりと観察するようにした。
- カエルを見て感じたり、知っていたことなどを素直に表現したりすることに共感し共に楽しんだ。

考察

園庭での遊びは草花や木、生き物が身近にあり、四季を通して動植物に対する興味を高めてくれる。他のクラスの子どもたちが楽しそうに遊んでいる姿を見て、興味や関心をもつ子もいるので保育者が間に入って異年齢の子どもともスムーズに交流ができるように援助している。いろいろな自然の中でも、池では年長児がエビやアメンボ、ヤゴ、オタマジャクシなどの生き物を熱心に採集している姿を毎日見掛ける。その姿を見ながら、時には虫網を使わせてもらったり、虫を分けてもらったりする経験が自然を色々な感覚で感じ、命の大切さやもろさ、不思議さ、面白さを知ることにつながると思う。自然とのかかわりを通して、心を揺さぶられたり言葉や体で表現したりする姿を大切にしたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

自然へ興味・関心をもつ姿



自然とかかわる楽しさを感じ自分なりの表現をする姿

対象児 年長児 (男A児)

記録日 平成21年 5月12(火)・14日(木)

場面 キュウリの成長

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

5月は、園庭にある草花や木々が新緑に輝く季節である。つぼみから花へ、葉が黄緑色から緑色に変わるなど、植物が成長することが実感できる季節である。

また、野菜の育成もこの時期に各クラスで行われている。年中の時には、カブやブロッコリーを育てた経験があり、年長では、ミニトマト、ピーマンを畑に植え、キュウリをクラスの近くに植えた。水を掛けることを楽しみながら、大きくなっていく野菜に興味をもっている子どもたちである。

子どもの姿

〔5月12日〕

- 年長組で育てているキュウリを見る。
- A「僕の足のここ(膝)まで伸びていたよ」
- 保「そうなんだ。Aくんの膝まで大きくなったんだね。また、伸びていたら教えてね」
- A「うん。みんなのおかげだね」
- 保「どうして、みんなのおかげなの？」
- A「みんなで水をあげているから、大きくなったんだよ」
- 保「だから大きくなったんだね。これからも楽しみだね」



〔5月14日〕

- キュウリのお話をします。
- 保「Aくん、キュウリが大きくなったかなと思って見てみたら、私のここ(膝)まであったよ」
- A「行ってみよう」
- キュウリのところに行き、高さをはかる。
- A「僕のここ(おなか)まであったよ」
- 保「大きくなったね。これから、どんどん大きくなるのが楽しみだね」

保育者の援助

- 4月24日に、年長組全員でキュウリを6本植えた。
- A児が植物の成長への驚きや不思議さ、興味をもつ姿を受け止め、言葉や行動に共感する。
- 「そうなんだ。Aくんの膝まで大きくなったんだ。また、伸びていたら教えてね」
- 自分だけではなく、友だちもキュウリに水をあげていることに気づき、みんなで育てていることを実感しているA児の言葉に共感した。
- 保育者がキュウリの成長している様子を伝え、先日のA児との言葉や思いをつなげた。
- 「Aくん、キュウリが大きくなったかなと思って見てみたら、私のここ(膝)まであったよ」
- 一緒にキュウリの成長を見て、大きさを確かめ、成長がずっと続いていることを感じられるような言葉掛けに努めた。
- 「大きくなったね。これから、どんどん大きくなるのが楽しみだね」

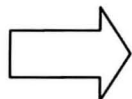
考察

本事例から、A児がキュウリの成長を楽しみにしている様子が行動や言葉から感じられる。保育室の近くで栽培しているので、キュウリの苗のまわりには子どもたちが頻繁に集まっている。実際に苗や葉や花を見たり、触ったりすることで、成長していることを感じている。また、保育者や子どもたちの行動から全員で育てているという思いになっている。このみんなで一緒に育てているという思いは、年齢がすすむにつれて大きくなっていくと思う。


保育者として、野菜を育てる中で子どもたちが発した言葉や行動を受け止め、次につなげていくような言葉掛けや援助を行うことが大切であると思う。これからもキュウリの実が大きくなっていく過程を追いながら、食べ物を自分で育てているという実感を味わい、成長していく様子を子どもたちと見つめていきたい。

本事例から見られたA児の自分らしさの広がり

キュウリの成長に驚いたり、喜んだりする姿



キュウリの成長を実感し、友だちや保育者と喜び合う姿

場面 シロツメクサ	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿 入園して約1か月が過ぎ、幼稚園で安心して過ごせるようになってきた子どもたちは、園生活の流れもだいぶん分かるようになってきた。登園して、身の回りの始末を済ませると園庭に出て、固定遊具で遊んだり、ウサギにえさをあげたりするなどして自分のしたい遊びを楽しんでいる。 この時期の園庭は、一面にシロツメクサが広がっている。子どもたちは保育者と一緒にシロツメクサを摘んだり、指輪に見立てたりする遊びも楽しみ、「これ、花束にして!」「先生、指輪、ここに付けて!」と言っては、自分の思いを満たしている。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<p>〔5月11日〕</p> <p>○ 保育者と一緒にシロツメクサを摘んで遊ぶ。 A「先生、ここに指輪して!」 B「Bも!」 C「花束にして!ママにあげるの!」 保「うわあ、お母さん喜んでくれるかもね。Bちゃんの指輪つくったら、花束にしようね」</p> <p>○ ウサギがシロツメクサを食べることを知り、ウサギにやる。 D「ウサギがシロツメクサを食べたの!」 保「そう。ウサギさんシロツメクサ、大好きだもんね。むしゃむしゃって食べたかな」 C「シロツメクサって、なあに?」 保「これ、シロツメクサって言うんだよ。花束にもなるし、ウサギさんのご飯にもなるんだね」 A「Aもあげる!」 B「これ、ウサギさんにあげてくる」 保「ウサギさん、喜んでくれるかもね」</p> <p>〔5月14日〕</p> <p>○ シロツメクサを摘んで、ウサギにあげに行く。 D「ウサギさん、ご飯だよ」 A「たくさん食べなさい」 B「ウサギさん、こっちにおいで。ご飯があるよ」 保「ウサギさんおいしそうに食べてたね」</p> <p>○ 砂場でシロツメクサの料理をごちそうになる。 E「先生～!来て!」 保「なあに?何ができたのかな」 E「もうちょっとでできるからここに座ってて」 保「どんな料理かしら!わくわくするね」 F「はい!どうぞ!」 保「あらっ、ほし組さんも一緒にお料理つくっていたのね」 B「わあ!シロツメクサのご飯だ。おいしそう!」</p>	<p>○ 子どもたちの思いを丁寧に受け止め、「～したい」という一人一人の思いを満たせるようにした。</p> <p>「お母さん喜んでくれるかもね。Bちゃんの指輪つくったら、花束にしようね」</p> <p>○ 子どもたちの気付きに共感しながら、シロツメクサの見方が広がるような言葉掛けをした。</p> <p>「花束にもなるし、ウサギさんのご飯にもなるんだね」</p>  <p>○ 遊びの面白さに共感できるように、子どもたちと一緒にシロツメクサを摘み、それをウサギにあげるようにした。</p> <p>○ 友だちとのつながりがうまれるよう、ウサギにえさをあげていた子どもたちと一緒に砂場へ行き、想像が膨らむような言葉掛けをした。</p> <p>「どんな料理かしら!わくわくするね」</p>
<p>考察 本事例は、「～したい」と自分の思いを満たして遊ぶ中で、様々な「他」とのかかわりからシロツメクサの見方が広がっていった事例である。 保育者は、子どもたちの「指輪にしたい」「花束にしたい」という思いを満たせるよう、丁寧に「かかわりながら、子どもたちの気付きに共感したり、一人の気付きが周りへの刺激となるような言葉掛けをしたりした。また、シロツメクサのかかわり方が広がるような言葉掛けの工夫も行った。」 子どもたちはシロツメクサを摘んで遊ぶ中でウサギのえさにもなることを知り、さらには、年中児がシロツメクサ入りのご飯を出してくれたことで、料理づくりもできるのだという感動を味わったのではないだろうか。 今後、四季折々の草花等を見付け、摘んだり、身に付けたり、ままごとなどに取り入れたい。そのためには、子どもたちの思いに耳を傾け、その時期ならではの「自然」とじっくりとかかわることができるよう援助を工夫していきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;">シロツメクサを摘んだり身に付けたりして遊ぶ姿</div> <div style="font-size: 2em;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;">シロツメクサがウサギのえさやままごとの素材にもなることを知り、自分たちもやってみようとする姿</div> </div>	

対象児 年中児(女A児)

記録日 平成21年 5月14日(木)

場面 シロツメクサでご飯づくり

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

新学期当初、進級児は進級児同士で遊ぶ姿、新入園児は一人遊びや新入園児同士で遊ぶ姿が多かった。しかし、5月の半ば頃からいろいろな活動を通して、友だちとのかかわりにも少しずつ変化が見られるようになってきた。4月当初から園庭の花や木の実への関心は高く、5月になってからもそれらを使った遊びが続いている。

子どもの姿

- ままごとハウスとテーブルを使って、ままごと遊びを始める。
A「先生、今日はお花を使ってご飯をつくろうよ」
保「そうだね、どんなご飯がいいかな～」
B「あの白い花を使ってつくればいいよ」
A「そうだよそうだよ、あの白い花でつくろうよ」
保「AちゃんもBちゃんも、白い花が好きみたいだね。あの白い花は、シロツメクサっていうんだよ」
A「そうそう、シロツメクサっていうんだよ」
B「シロツメクサをいっぱいにとってご飯にしよう！」
- 砂場用の皿や、ふるいの中にシロツメクサを摘み続ける。
A「先生、いっぱいとれたよ」
B「私もシロツメクサいっぱいとれたよ」
A「(Bに向かって) 私と一緒にだね」
- 元の場所に戻ってくる。
保「はな組さん、ほし組さん家によこそ～」
はな保「こんにちは、おじゃましています」
A「ご飯ですよ～、どうぞ」
B「サラダですよ～」
はなC「わあ～」

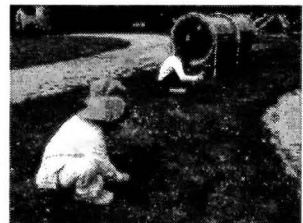
保育者の援助

- A児は花摘みが大好きで毎日花を摘んでいるが、「自分対保育者」という姿勢が強く、友だちとのかかわりが少ない。同じ遊びが好きな友だちがいることに気付かせたいと思い、大好きな花摘みを通して互いがかかわれるよう、思いを伝える橋渡しの援助をするよう心掛けた。
「AちゃんもBちゃんも、白い花が好きみたいだね。あの白い花は、シロツメクサっていうんだよ」
- 二人が同じ目的で興味をもっている白い花に、「シロツメクサ」という名前があることを知らせることで、知識としてだけでなく、二人の間にシロツメクサという共通の話題がもてるようにした。
- A児の言葉にすぐに返事をせず、子ども同士の会話が生まれるように見守った。
- はな組がいることをスムーズに受け入れられるように、お客さんとして迎える言葉掛けをして、遊びの雰囲気を壊さないようにした。
- A児とB児が自分たちのつくった料理を二人ではな組に振る舞う姿には、シロツメクサ摘みを通して、友だちとしてのかかわりが生まれたと受け止め、見守るようにした。

考察

本事例は、新入園児二人を対象を絞ったものである。今回は、A児がこれまで保育者と一緒に、または一人での遊びが、二人、そして、はな組ともかかわれた事例である。A児はこれまで周囲の環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを遊びに取り入れる姿が毎日見られていたが、遊びの中での人とかかわりがなかなかもてずにいた。そこで保育者として、互いに花摘みが好きな子ども同士ということで、シロツメクサを使った遊びを通して、「同じ遊びが好きな友だちがいることに気付かせたい」という思いをもちながらかかわった。今回はシロツメクサの名前を、保育者から教える形になったが、子どもから聞かれてから教えたり、一緒に調べたりする方法もあると考える。今後は遊びの中で「白い花」ではなく、「シロツメクサ」という言葉が聞かれたり、他の友だちに教えたりする姿も見られるようになるだろう。

保育者として、今後も自然の中での遊びを通して、好奇心、思考力の基礎が培われることを意識しながらも、自然とのかかわりを通して生まれる人とかかわりも大切にしていきたい。



本事例から見られたA児の自分らしさの広がり


友だちと会話をしながらシロツメクサを摘んだり料理をつくったりする姿



気付いたことや自分が経験して学んだことを友だちに伝え合い、一緒に楽しむ姿

対象児 年中児

記録日 平成21年 5月15日(金)

場面 畑の野菜	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿</p> <p>入園、進級してから、子どもたちは園庭のシロツメクサを摘んだり、春の陽だまりを感じたりするなどして身近な自然と触れ合う姿が見られる。</p> <p>また、5月初旬、子どもたちはピーマンの苗を植え、苗に水を掛けたり、見たりするなどして、様々な自然に親しんでいる。特に進級児は、年少時に二十日大根の苗を植えた経験からか、実がなることを楽しみにしたり、新入園児を誘って畑に出向いたりする姿が見られる。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 小さくピーマンの実がなっていることに気付く。</p> <p>A「先生、ピーマンがなっているよ。見て見て、おいしいピーマンになるかな」</p> <p>保「本当だ！ピーマンがなっているね。みんな、水を毎日掛けていたからね」</p> <p>B「こっちの（苗）は白い花がたくさんなっているよ」</p> <p>○ 隣の畝になっているトマトに気が付く。</p> <p>C「うみ組さんのはトマトだ」</p> <p>B「あ、トマトは黄色い花だよ」</p> <p>保「うみ組さんは、トマトを植えたんだね。トマトは黄色い花なんだ」</p> <p>B「先生、花の色と実は違う色になるんだね、どうしてだろう」</p> <p>保「そうだね。どうして、花と実の色は違う色になるんだろうね、なんでだろう」</p> <p>B「ピーマンの（実の）緑が全部花の色まで取っちゃうんじゃない」</p> <p>A「本で調べてみようよ、お部屋にあったよ」</p> <p>○ 保育室へ行って本を見る。</p>	<p>○ 子どもたちの嬉しさや驚きに共感することができるよう言葉掛けを行った。</p> <div data-bbox="847 674 1422 730" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「本当だ！ピーマンがなっているね」</p> </div> <p>○ 子どもたちのやり取りを見守ったり、子どもの気付きを他の子どもにも広げることができるよう言葉を繰り返したりした。</p> <div data-bbox="847 913 1422 999" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「うみ組さんは、トマトを植えたんだね。トマトは黄色い花なんだ」</p> </div> <div data-bbox="1114 1005 1417 1229" data-kind="parent" data-rs="2">  </div> <p>○ 子どもたちの探究心をくすぐることができるよう言葉掛けを行った。</p> <div data-bbox="847 1323 1422 1408" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「どうして、花と実の色は違う色になるんだろうね、なんでだろう」</p> </div>
<p>考察</p> <p>ピーマンやトマトの成長の過程を観察することを通じて、花の色に気付くなどの新たな発見や「どうしてだろう」という様々な探究心を膨らましている場面である。この中で、自分たちで不思議に感じたことを本で調べてみようとする姿も見られた。これは、年少時に二十日大根を栽培したときやダンゴムシを見つけた場合などに降園活動で関連の本を読んだり、環境構成の一つとして絵本コーナーにいつでも本を見ることができるよう置いたりしていたことがきっかけになっていると考える。</p> <p>今後も、新たな発見を共感したり、時には促したりするとともに、子どもたちの「なぜ」「どうして」といった探究心を大事にし、それを自分たちで調べようとする姿へとつなげていきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px;"> <p>自然に親しんだり、探究心を膨らましたりする姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px;"> <p>不思議に感じたことを自分たちで調べようとする姿</p> </div> </div>	

～Ⅰ期の事例より～

クラス	年 少	年 中	年 長
保育者の援助の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々なかかわり方を子どもたちと一緒に楽しむ。 ○ 気付きに共感したり、一人の気付きが周りの刺激となるような言葉掛けをしたりする。 ○ かかわりが広がるような言葉掛けをする。 ○ 年長児のしていることを保育者が間に入って伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同じ自然（シロツメクサ）に興味をもって、いる友だちがいることに気付くことができるような言葉掛けをする。 ○ 自然を介して友だちとのかかわりを楽しむ子どもたちの様子を見守る。 ○ 子どもの発見や驚きに共感する。 ○ 一人の気付きを周りへも広げるような言葉掛けをする。 ○ 子どもたちの「どうしてだろう？」という探究心をくすぐるような言葉掛けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの経験を生かして、自分たちでもっと楽しめるような遊びを提案する。（シロツメクサのアクセサリーづくりなど） ○ 友だちと教え合って楽しんでいる姿を見守る。 ○ 子どもの「自然」に対する驚きや不思議さを感じる姿を受け止め、共感する。 ○ 子どもが興味をもっていることを受け止め、その場限りにせず、思いが持続していることを大切にしたい言葉掛けをする。
環境構成の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちの目の高さにも（虫かご）を置くことで、じっくりと観察できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「自然」（シロツメクサ）を使ってままごとを楽しむことができるテーブルの位置の工夫：ままごとハウスの側に置いておく。 ○ 子どもたちの「知りたい」を大切にしたい調べるができる場の設定をする。（関連する絵本を身近に置くなど） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友だちとじっくりと遊びに取り組むことができる広さを確保する。 ○ いつでも「自然」（キュウリなどの野菜）に触れたり、見たりできるように保育室近くにプランターを置く。 ○ 成長の様子や長さ、大きさなどを実感できるような場を設定する。（グリーンカーテンの設置）

かかわった自然とそれを使った遊びの例

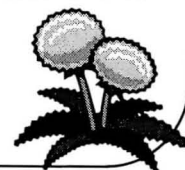
《自然》

サクラ、シロツメクサ、野菜の苗、オタマジャクシ、エビ、チョウ、暖かい日差し、さわやかな風など

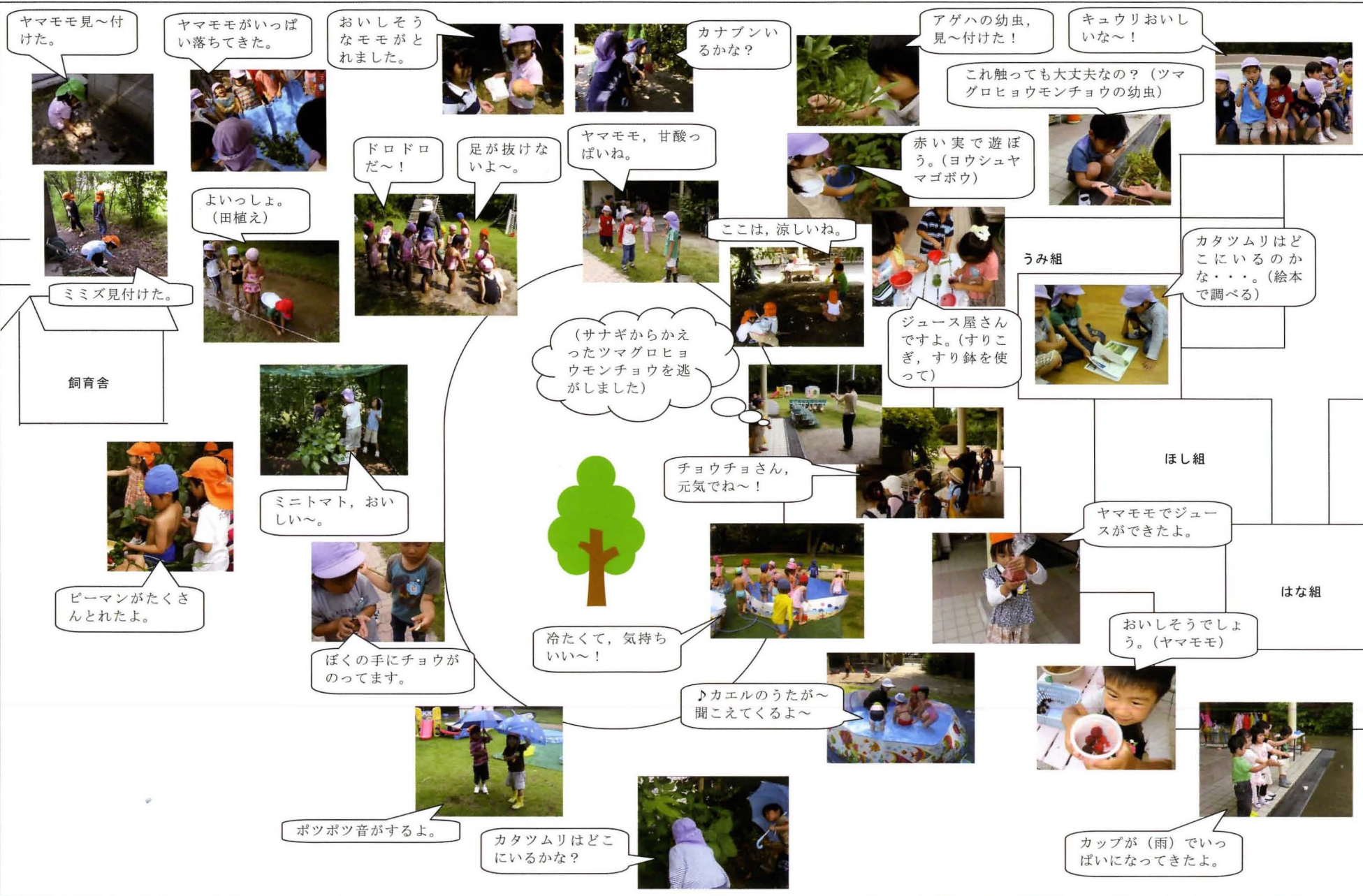
《遊び》

シロツメクサ：ままごとにする、ウサギのえさにする、指輪をつくる、花束をつくる（花紙やリボンを使うと本物のよう）、つなげていって首飾りや花の冠にする

風：色画用紙、ペットボトルを使った風車づくり







対象児 年長児

記録日 平成21年 6月 3日 (水)

場面 カタツムリ探し

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

年長児の子どもたちは、四季を通じて、園庭にいるチョウやバッタなどの昆虫を探すことが大好きである。また、これまでの経験から、どこにどんな昆虫がいるのか、どんなものを食べるのかなども知っており、友だち同士で見付けて世話をしようとする姿もうかがえる。梅雨時期に入り、カタツムリやカエルなどの本を見たことで、雨の日の生き物にも興味をもっている子どもたちである。

子どもの姿

- クラスで、カタツムリの折り紙を折る。
A「カタツムリとか、いるかな？」
保「探しに行ってみようか」
A「うん、行こう」
- 園庭に出てカタツムリを探す、なかなか見付からない。
B「そうだ、本を見てみよう」
カタツムリの本を見て、葉の下に隠れていることなどを知る。
保「この葉っぱ、幼稚園のどこかで見たような気がするんだけどな」
B「あっ、ぶらんこの後ろの葉っぱだ」
保「アジサイっていう花の葉っぱだね」
- C・D児も入り、再び園庭に出掛ける。
C「カタツムリの歌を歌ったら出てくるかな？」
(D児が葉っぱを一枚ずつめくる。)
D「(カタツムリが) いたよ！」
- 他のところを探していた子どもたちも集まって来て、みんなで見たり、保育室に帰り、保育者や友だちに見せたりする。

保育者の援助

- 雨天時には、この時期ならではの体験ができるよう、園庭を散歩したり、カタツムリを探したりすることを一緒に楽しんだ。
- 梅雨時期ならではの自然に出会った時に、興味をもったことや不思議に感じたことを調べられるように、保育室に図鑑や絵本を準備しておく。
- 子どもたちの思いを受け止め、実現していくために一緒に考えたり、必要に応じて、言葉掛けをしたりする。

「この葉っぱ、幼稚園のどこかで見たような気がするんだけどな」

- 子どもたちと一緒に協力して、カタツムリを探すことを手伝う。
- 一緒にカタツムリの歌を歌いながら、見付けたという思いに共感する。
- カタツムリを見つけた喜びを一緒に味わう。



考察

本事例は、カタツムリを見付けたいという思いを実現するために、子どもたちが協力したり、考えたり、調べたりした場面である。A児とB児の思いが次第にたくさんの友だちへという思いが広がっていった。これまでの経験(年少・年中)から、日頃虫探しをしている池を探したり、草むらの中を探したりしていた。集中しながらの約1時間、どうしたらカタツムリを見付けられるかを考えて、本で調べたり、友だちと話し合ったり、協力して行動したりしていた。この様子から、協同性の芽生えを垣間見たような気がした。カタツムリを見付け、見付けたカタツムリと一緒に見ている時の子どもたちの笑顔は、充実感があふれていた。

これからも、興味や疑問をもって調べたり、試したり、探したりすることが楽しいことであること、知ることが喜びになることを子どもたちと一緒に実感したい。そのためにも、年間を通して様々な自然の様子を見落とすことなく、環境を整え、言葉掛けの工夫をしていきたい。

本事例から見られた年長児の自分らしさの広がり

カタツムリを見付けようとする姿、友だちと協力する姿



友だち同士で協力し合い、一つのことを達成する姿

場面 ミミズの不思議

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

入園して約2か月が過ぎ、幼稚園の生活にも大分慣れてきた。子どもたちは、園庭でぶらんこに乗ったり、ウサギにえさをあげたりして自分のしたい遊びを楽しんでいる。

5月末から、垣根の下にダンゴムシやミミズも見られるようになってきた。「先生、ミミズ捕まえに行こう」「ほくは、ダンゴムシがいいな」と保育者を誘い、生き物探しをする日が続いており、子どもたちは、保育者に捕まえてもらったダンゴムシやミミズを手にとり、ポリ袋に入れて持ち帰ったりして、思い思いに生き物とかかわる姿を楽しんでいる。中には、生き物に触れることを怖がる子もいるが、保育者や周りの友だちがかかわっているのを見て、自分も触ってみようとする姿も見られるようになってきた。

子どもの姿

- 先生と一緒にダンゴムシ、ミミズ探しに行く。
A「先生、ダンゴムシ探しに行こう」
B「私も！」
C「ほく、ミミズがいい！」
保「いいよ。たくさん見つかるといいなあ」
- 保育者と一緒にダンゴムシ、ミミズを探す。
C「捕まえた！」
保「やったあ。Cくんが捕まえたよ。ダンゴムシって、何を食べるんだっけ？」
A「葉っぱ！土も入れるの」
保「Cくん、(ミミズ)いたよ～」
C「うわあ、長い！」/D「つぶしてやる～」
保「え～!!」
D「だって、怖いんだもん」
- ミミズに水を掛ける。
C「雨だ～」/D「雨、雨」
保「え～、ミミズさんに掛けちゃの？ほら、ミミズさん、弱くなってしまったよ」
C「動いた～」/D「動いた！」
保「よかったね。ミミズさんには水じゃなくて、土がいいよ」
- ミミズのからだについて話す。
C「先生、ミミズ、めめは？」
保「う～ん、どこにあるのかな」
D「ないよ！」
C「(動く先を指して)おめめ、あるよ！」
保「Cくん、『いたい』って言ってるかもよ。優しく触ってね」
B「(ミミズのおしりから)何か出てきた」
A「たまごだよ」/E「たまごかな」
- Cは、ミミズを手の平にのせる。



保育者の援助

- 「ダンゴムシを見付けたい」などという思いを受け止め、期待が高まるような言葉を掛けをした。
「たくさん、見つかるといいなあ」
- 捕まえた喜びに共感すると共に、友だちとのつながりが生まれたり、これまでの経験からダンゴムシと一緒に何を入れたらいいか気付けるような言葉掛けをした。
「やったあ、Cくんが捕まえたよ」
「ダンゴムシって何を食べるんだっけ？」
- ミミズの様子に気付くような言葉を掛けたり、子どもたちと一緒にミミズが動いたことを喜んだりした。
「ミミズさん、弱くなってしまったよ」
「よかったね、ミミズさんには、水じゃなくて土がいいよ」
- ミミズのからだについて、思っていたことを言葉にする姿を共感的に受け止め、子どもたちの様子を見守りながら、一緒に考えたり、ミミズが動いていることを感じたりするような言葉掛けに努めたりした。
「う～ん、どこにあるのかな」
「『いたい』って言ってるかもよ。優しく触ってね」

考察

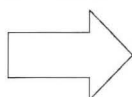
本事例は、ダンゴムシ、ミミズ探しをして遊ぶ中で、生き物の面白さ、不思議さを味わっていった事例である。

保育者は、子どもたちと一緒にダンゴムシやミミズにかかわりながら、生き物の不思議さに共感したり、命があることに気付けるような言葉掛けをしたりした。

年少児の生き物の扱い方は、時には残酷で、ダンゴムシを指でつぶしたり、ミミズをちぎったりすることもある。本事例でも、子どもたちの言葉(「つぶしてやる～」等)やかたわり方に胸を痛める場面がいくつかあり、その都度、どう援助すればよいか迷いもあった。しかし、そうした経験も含めて、生き物とかかわる姿を大事にしていきたい。男児Cが最後にミミズを手の平にのせたのは、ミミズへの親しみの気持ちはもちろん、ミミズを思う気持ちが生き物と繰り返しかわる姿を見守ったり、面白さを共に味わったりしながら、自然への親しみの気持ちや慈しむ気持ちを育んでいきたい。

本事例から見られたC児の自分らしさの広がり

ダンゴムシやミミズに興味をもってかかわる姿



ミミズのからだの不思議さを感じたりミミズを優しく扱ったりする姿

対象児 年中児

記録日 平成21年 6月 9日 (火)

場面 水溜まりとエビ

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

入園して約3か月が過ぎた。友だちの名前と顔が一致してきた頃から、友だちと誘い合って遊ぶ姿が多く見られるようになり、行動範囲も広がってきている。そのような中で、4月に畑にピーマンの苗植え、5月に一人一鉢でハウセンカの種蒔きをして以来、子どもたちは成長を見守りながら毎日のように水掛けを楽しんでいる。6月に入り初夏の季節を感じている子どもたちは、水遊びの前進と見られる水を使った遊びが増えてきていた。

子どもの姿

- ハウセンカの鉢に水掛けを始め、繰り返すうちに鉢は水でいっぱいになる。
保「お水がいっぱいで（ハウセンカ）溺れないかなあ」
- 芝生に水を掛け始める。
A「畑をつくろう！」
B「僕も畑をつくる」
C「水をいっぱい溜めよう」
保「すごいね、みんなで一緒に水を掛けていたら海みたいに水がいっぱいになってきたね」
- 水溜まりに裸足で入り、飛び跳ねたり、水を手で触ったりする。
A C「うわあ～、気持ちいい～」
B「もう夏みたいだもんねえ」
保「本当だね、先生も冷たくて気持ちがいいなあ」
- C児がエビを水溜まりに放す。
保「Cくん、エビさん大丈夫かな」
C「大丈夫だよ」
保「でも、いつも住んでいる池のお水と違うし、水が少なくてバタバタしているみたい。苦しいかもしれないなあ」
C「・・・・・・」（その後エビを虫かごに戻す）
- ジョウロにエビを移し、そこへ水道の水を入れる。
保「エビさんは池の水で住んでいるから水道の水は苦しいかもね」
C「・・・・・・」 ※ 溢れるまで繰り返す

保育者の援助

- 子どもたちの「お水をいっぱい掛けたい」という気持ちを受け止めながらも「こんなにあげても大丈夫かな」と感じ、考えられるための言葉掛けをした。
「お水がいっぱいで溺れないかなあ」
- 友だちと場所や遊びを共有しながら一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになってきているので、友だち同士で遊びのアイデアが広がるように見守った。また、水の心地よさを共感するために保育者も子どもたちと一緒に裸足になり、感じたことを伝え合うように心掛けた。
「本当だね、先生も冷たくて気持ちがいいなあ」
- C児の「～してみよう」という試す姿を受け止め、エビを放すまでは声を掛けずに見守った。そして、行動に移した時に「これでいいのかな」と考えられるような声掛けをした。ただ、今回C児はこれまでの経験から、まだ状況を判断できないと捉え具体的な言葉掛けを試みた。
「でも、いつも住んでいる池のお水と違うし、水が少なくてバタバタしているみたい。苦しいかもしれないなあ」
「エビさんは池の水で住んでいるから水道の水は苦しいかもね」

考察

今回の事例の前半は、友だちと場所や遊びを共有しながら一緒に遊ぶ中で、友だち同士で遊びのアイデアを出し合ったり、自分が感じたことを言葉で表現したりすることで、友だちと一緒に共感し合う姿が見られた場面である。その後、みんなで力を合わせて水を溜めた水溜まりで、裸足になり水の感触を十分味わえた頃に、C児がエビを水溜まりに入れてみようとした。当時、保育者はどうしてC児はエビをここに放してみようとしたのかなかなかわからなかった。「ここに放したらどうなるかな」という「好奇心」という受け止め方をするのが一般的であろう。保育者はエビの命のことで頭がいっぱいになり、C児の姿を見守りながらも、実際には「この水では苦しいのでは」と、具体的な判断を急がせてしまったように思う。その後、C児は自分が溜めた水の中で裸足になり、友だちと一緒に水の心地よさを十分に味わった経験があったからこそ、「そこにエビを放せばエビもきっと気持ちよく泳ぐかも」という別の気持ちや思いがあったのではないかという見方もできるのではないかと考えた。

今後は、子どもたちの「～してみよう」「～したらどうなるかな」という思いの中にある、更に深い部分を大事にし、子どもたちの思いを見取っていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

気付いたことや自分が経験したことを友だちと伝え合い、一緒に楽しむ姿



興味・関心を広げ、自分なりにもっと知ろうと試す姿

場面 捕まえたエビで・・・

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

池のエビやヤゴを捕まえては、友だちや保育者に見せたり、年下の友だちにあげたりして、捕まえる喜びをたっぷり味わっていた子どもたち。初めの頃はエビを捕まえることができたことに喜びを感じていた子どもたちも、次第に捕まえたエビの数や大きさにこだわり始めていた。時には、お腹が膨らんでいたり、卵を抱えていたりするエビもいて、友だちと一緒にじっくりと眺めてその不思議さを味わう姿が見られた。

捕まえたエビを家庭に持ち帰り世話をする子ども、幼稚園にそのままにして忘れてしまう子どもと捕まえた後の扱い方は様々である。

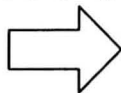
子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 小雨の中、池でエビ捕りをする。</p> <p>A「エビいる(欲しい)人～」</p> <p>B「ちっちゃいエビ」</p> <p>C「Bくん、エビこっち！」</p> <p>(水溜まりにエビを放すことをうながす)</p> <p>B「分かった！」</p> <p>(BとCがエビを水溜まりに放す)</p> <p>○ A, B, Cの3人で水溜まりに放したエビを虫網で探していると、先生がやってくる。</p> <p>C「エビ、入れちゃった」</p> <p>A「エビ逃がしちゃった」</p> <p>B「2匹！」</p> <p>保「えっ、みんなで探そう！」</p> <p>D「とにかく網で捕まえよう」</p> <p>○ 水溜まりの底を虫網ですくったり、手で水をすくい出したりしながらエビを探す。</p> <p>保「Cくん、池の水と違うからエビさん大変かも・・・」</p> <p>(しばらくして)</p> <p>B「エビ、いたいた！」</p> <p>保「よかったあ」</p> <p>○ 残りの1匹を探し続けるがなかなか見付からない。</p> <p>保「Bくん、Cくん、あと1匹どうするの？」</p> <p>BC(しまったなあという表情をする)</p> <p>保「今日は残念なことをしちゃった。エビさんにかわいそうなことをしたよ。ここ(水溜まり)はおうちじゃないんだよね」</p>	<p>○ 雨の日の生き物にも興味をもって園庭に出掛ける姿を見送った。</p> <p>○ エビを水溜まりに入れたことを伝えてきた子どもたちの言葉を受け止め、エビを探したい気持ちをもって察して言葉掛けをした。</p> <p>「えっ、みんなで探そう！」</p> <p>○ 子どもたちと一緒にエビを探しながら、エビの生命について考えることができるように言葉掛けした。</p> <p>「Cくん、池の水と違うからエビさん大変かも・・・」</p> <p>「今日は残念なことをしちゃった。エビさんにかわいそうなことをしたよ。ここ(水溜まり)はおうちじゃないんだよね」</p> <p>↓</p> <p>「エビは池と水溜まりとどっちが幸せだったのかな・・・」</p>

考察

生き物を捕まえることができた喜びから、どんな風に育てたらいいのだろうと興味に移ってきた子どもたちは、絵本を見ながら様々なことを知りたいと感じている姿が見られる。次の段階として、子どもたちが生き物の生命の尊さに気付き、大切にしようとする姿を育てていきたいと考える。

本事例では、生き物の生命について理解しながらも、「試してみたい」という気持ちからエビを水溜まりに放したのであろう。逃がしたエビを探す子どもたちに、保育者は生命の大切さについて考えてほしいという思いをもって言葉掛けしたが、子ども同士で話し合ったり、自分たちの行動を振り返ったりすることができるような言葉掛けをもっと工夫するべきだったと感じる。(例：灰色四角の言葉掛け) 子どもたちが自分たちの行動を振り返り、自分たちで話し合い、判断しようとする姿をうまく引き出せるような言葉掛けや寄り添い方を探していきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

水溜まりにエビを放し、
どうなるのか試す姿水溜まりではエビが困ってしまうこ
とを感じ、エビを助けようとする姿

場面 キノコのスープ

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

園の生活に慣れてきて、自分の好きな遊びや好きな友だちと遊びたい気持ちが徐々に出てくるようになり、「お外に遊びにいきます」「○○ちゃんとブランコをしたい」等の言葉とともに、園庭への興味・関心が高まってきている。子どもたちは、今の時期ならではの池の生き物やチョウやトンボなどが目にとまるようになり、園庭の変化に気が付き始めている。

子どもの姿

保育者の援助

- 〔6月25日〕
- ポリ袋に水とキノコを入れたものを持ってくる。
 - A「先生、ほら、キノコのスープ」
 - 保「おいしそうだね。どうするの」
 - A「おかあさんにプレゼントするんだ」
 - 保「おかあさん、うれしいかもね」
 - 〔6月30日〕
 - 雨上がりの園庭を見る。
 - B「先生、一緒にお散歩に行こう」
 - 保「いいよ」
 - B「Aくんが持ってるキノコがBもほしい」
 - 保「じゃあ、AくんやCくんに聞いてみようか」
 - C「あのお家の近くにあったよ」
 - シロツメクサの中のキノコを見付ける。
 - B「これ、いっぱいつんで持って帰る」

- 2～3人の友だちと砂場でレストランごっこをしていたA児がポリ袋に水とハラタケ類のハタケコガサタケ（畑小笠茸）らしき小さなキノコを入れたものを、とてもうれしそうに見せてくれた。そこでA児のうれしい気持ちに添いながらキノコスープを見せてもらった。
 - BがAやCがもっている水とキノコ入りのポリ袋を見て、自分も欲しくなったことを受け止め友だちとのかかわりが生まれるような言葉掛けをした。
- 「じゃあ、AくんやCくんに聞いてみようか」

考察

本園の園庭は、4月には園庭一杯に咲くシロツメクサを集めたり、クスノキの落ち葉や木の実を拾ったり、梅雨時にはアジサイの花を見たりすることができる自然に恵まれた園庭である。そんな園庭で普段あまり目立たないが茶色の小さなキノコを見付けたことで、年少児なりの興味（自分も欲しい、たくさん欲しい、別なものはないのか等）をもったり、発見（たとえ小さくても、きれいでなくても）をしたりする喜びを味わうことができた。

子どもたちが自分の手の中に入るくらい小さい自然も大切に作る姿に共感し、これからの毎日の生活の中で一緒に様々な自然と親しんでいきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

発見した喜びを感じる姿



興味をもった友だちが仲間に加わる楽しさを感じる姿

場面 キノコ

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

子どもたちは、入園・進級してから様々な動植物に触れ合っている。最近では、エビやモンシロチョウ、イトトンボなどを捕まえたり、畑のピーマンやホウセンカに水掛けをしたりする姿が見られ、多くの自然に親しみをもちつつあるように感じた。一方で、エビを水溜りに放したり、生物を手荒く扱ったりする姿も見られ、機会を捉えて生命の大切さについて話していかなければならないと考えている。

子どもの姿

- キノコを見つけたA児が保育者を呼びにくる。
A「先生、キノコがたくさんあったよ。毒キノコ、毒キノコ。見にきて」
保「本当！？キノコがあったんだ。どんなキノコだったかな」
- キノコの場所へ行くと、B児・C児がキノコを観察している。
A「先生、ほらいっぱいでしょ。毒キノコなんじゃない」
B「おうちで食べているキノコと似ているから食べられるかもよ」
保「わあ。本当にたくさんだね。でも、おうちのキノコとは少し違うかもしれないから、食べるのはやめようね。なんだか、はな組さんの時に歌った『キノコのうた』を思い出すね」
- 「キノコのうた」を歌っていると、D児がやってくる。
ABC保「～♪キノコは生きてるんだね♪」
B「あっ、キノコは生きているんだよね」
D「生きてないよ、だって動かないもん」
保「そうだね。キノコは動かないもんね。でも、キノコもホウセンカも大きく成長するから、生きているのかもしれないね。ウサギさんたちみたいに花やキノコも大事にできるといいね」
B「大事にしようね」

保育者の援助

- 子どもたちの思いに共感し、A児と共に園庭へ出掛ける。

「キノコがあったんだ。どんなキノコだったかな」

先生、ほらいっぱい
でしょ。



- 子どもたちの思いを大切にすると同時に、子どもたちに家庭で食べているキノコとは違うことを話し、口に入れることがないように伝えた。

「わあ。本当にたくさんだね。でも、おうちのキノコとは少し違うかもしれないから、食べるのはやめようね」

- キノコが生きている、生きていないどちらの思いも認めると同時に、動物同様に植物も大事に扱ってほしいという思いを込めて言葉を掛けた。

「そうだね。キノコは動かないもんね。でも、キノコもホウセンカも大きく成長するから、生きているのかな」

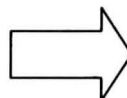
考察

本事例は、キノコを通して、植物が生きているか否かを考え、ウサギや保育室の金魚などと同様に植物においても大切にしようという思いの芽生えが見られた場面である。年中児において、命の概念の理解度は個人の差が大きいように感じる。しかしながら、それぞれの実態に即して、命の尊さや大切さについて感じることができるよう繰り返し伝え、その思いを育んでいくことが重要になってくるであろう。それは、動物だけではなく、植物などの小さな種から大きく成長する植物においても同様であると考えられる。

今後も、動物はもちろん、植物においても命について考える場面の一つ一つを大切に、命は大切であるという思いを育んでいけるよう、言葉掛けを工夫したり、保育者自身、豊かな感性を磨いたりしていきたい。

本事例から見られた年中児の自分らしさの広がり

動植物と触れ合いた
いと思う姿



動植物を大切にしようと
する思いが芽生える姿

～Ⅱ期の事例より～

クラス	年 少	年 中	年 長
保育者の援助の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもの思いを受け止め、期待が高まるような言葉掛けをする。 ○ 生き物を捕まえた喜び、生き物の不思議さに共感する。 ○ 生き物の扱い方に気付くことができるような言葉掛けをする。 ○ 命があることに気付くことができるような言葉掛けをする。 ○ 子どもたちなりに興味をもったり、発見したりする姿に寄り添う（見守る）。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちの思いを受け止めながら、気付いたり、自分の行動について考えたりすることができるような言葉掛けをする。 ○ 友だちとアイデアを出し合う姿を見守ったり、保育者も仲間になって加わったりする。 ○ 生き物の命について感じたり、考えたりすることができるような言葉掛けをする。（「これでいいのかな？」） ○ 植物も動物と同様大切に扱うことができるような言葉掛けをする。 ○ 子どもの実態に合わせて命の大切さについて繰り返し伝えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主体的に生き物とかわる姿を見守る。 ○ 命について子ども同士で話し合ったり、自分たちの行動を振り返ったりすることができるような言葉掛けをする。 ○ 子どもたちが自分たちで生き物について調べたい、見付けたいと興味をもつ姿を見守る。 ○ 子どもたちが興味をもつ姿に寄り添い、一緒に探したり、見守ったり、仲間になったりする。 ○ 自分たちで探究し、知ることが喜びとなることを子どもたちと共に実感する。
環境構成の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが興味をもちそうな生き物（ミミズ、ダンゴムシ）がいそうな場所を把握しておく。 ○ 集めたものを持ち運びしやすいポリ袋を用意しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちで植物を育てる喜びや楽しさを味わえるように保育室近くに一人一鉢を設置する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 季節に合った折り紙（カタツムリ）を提案し、子どもたちの遊びと季節とのつながりを意識する。 ○ 時期に合った絵本を保育室に置いておく、いつでも調べることができるようにしておく。 ○ 年間を通した様々な「自然」の様子を見落とさずに環境を整える。

かかわった自然とそれを使った遊びの例

《自然》

ヤマモモ、モモ、米の苗、アジサイ、ミニトマト、ピーマン、キュウリ、アサガオ、ヨウシュヤマゴボウ、チョウの幼虫、チョウ、カタツムリ、トンボ、雨、湿っぽさ、まぶしい太陽、木陰の涼しさ・心地よさ、水の心地よさなど

《遊び》

雨：空き容器や袋を使って雨を集める、缶容器を使って雨が落ちる様々な音を楽しむ
水：水遊び（金魚すくい、ペットボトルシャワー、牛乳パックの船など）

